家庭画報

9
September 2015
KATEIGAHO

至福の北イタリアを巡る

世界遺産で出合う美食とワイン

世界遺産、トリノの壮麗な王宮へ
水辺のホテルで堪能する洗練の美味
ワインの王、バローロのぶどう畑ほか

私の愛する「日本橋」

この街ゆかりの十七人が誘う温故知新の魅力

古典文学のきもので優雅に

原田美枝子がまとう
『源氏物語』『伊勢物語』

祖父母と孫の肖像

～孫子の世代に贈るメッセージ
志村ふくみ、三浦雄一郎、中里 隆、森 英恵

「頭皮」のアンチエイジング

この秋「ソフトハンドバッグ」でお洒落に

〈綴じ込み付録〉
家庭画報特選
「日本橋」が誇る
手土産48品

源氏物語、伊勢物語
古典文学のきものでいま、優雅に

平安時代に成立した、絢爛たる宮廷生活や貴公子の恋愛模様、そして栄枯盛衰を描き出した『源氏物語』と『伊勢物語』。この二つの名作は時代を超えて読み継がれ、江戸時代の大奥では上級の御殿女中が古典文学の教養を高めるための教本として重用されました。友禅染めが発達すると、小袖にこうした物語を彷彿させる文様が施され、人気を博します。世界に類を見ない、衣服に物語の文様を描くという文化――。家庭画報はこれを今に伝え、二つの古典文学を主題にきものを新作。女優・原田美枝子さんが、雅な世界を表現します。

着る人／**原田美枝子**
撮影／鍋島徳恭（一二〇～一二一ページ、人物）　中村 淳（静物）
ヘア&メイク／徳田郁子　着付け／小田桐はるみ（人物）　赤江千香子（静物）
小物スタイリング／土田麻美　きものコーディネート・取材・文／相澤慶子
取材協力／切畑 健　撮影協力／三溪園

夕顔・花宴・野分・行幸
若菜上（御所解き）文様小袖

『源氏物語』の中の五帖のエピソードが見事に文様化された、江戸時代の御所解き文様の小袖。全体に文様を配した「総文様」の小袖は、高位の女性の料であるということがうかがえます。位が下がるにつれて文様が少なくなり、次位は「右袖がかりの腰高文様」という、背中央や左肩に文様のないものを着るしきたりでした。上・上前に描かれた「行幸」の物語。雪景色に鳳輦（ほうれん）が描かれ、帝の存在を暗示しています。髭黒の右大将が供奉する場面を、胡籙（やなぐい）と冠で表しています。
丸紅蔵（京都文化博物館寄託）・江戸時代後期

澪標（みお つくし）

明石の君の品格を帯に

第一四帖の「澪標」は、源氏二八歳秋から二九歳秋までの物語。
源氏が明石から帰った年の十月、父・桐壺帝の菩提のために法華八講を催します。翌年二月には、藤壺の宮と源氏の子である東宮が元服とともに即位され、冷泉帝となります。源氏は譽居前の右大将から大納言に昇進し、ますます権勢を増しますが、須磨、明石の時代を経て、時代の寵児であった青春の頃よりも成長し、人格に円満さが加わっていました。
同じ頃、明石の君にも女の子が生まれます。源氏はかつて占師に「御子が三人、帝と后と太政大臣におなりになる」と予言されたのを思い出し、京から乳母を下し、五十日（いか）の祝いにもさまざまなものを遣わします。源氏が住吉神社にお礼参りに行った際、明石の君もちょうど参詣に訪れていましたが、源氏の行列のあまりの立派な光景に、会うことを控え、船で難波（なにわ）のほうに退去してしまいます。
これに気づいた従者が源氏に報告したので、源氏は明石の君を憐れに思い、文を遣わして都での生活をすすめます。しかし明石の君は源氏の立場を思うあまり決心がつきかねる、思い乱れるのでした。

江戸初期に活躍した画家・俵屋宗達の「澪標図屏風」を写した豪華な染め帯です。塩瀬地を金茶に染めて金屏風の雰囲気を出し、住吉神社に参拝する源氏の隆盛な行列と明石の君が乗る御座船を描くことで、情感溢れる場面を表現しています。帯38万円／豊中・織元

「潮景」の場面を写した帯には、濃い朽葉色地に常磐色で微細な小紋を染めた、こっくりとした奥深い色彩のきものを合わせました。茶会や展覧会に出かける日などに、知性と品格が薫る美しい後ろ姿を演出します。初めて会うかたが多い席では、帯に描かれた情景が、会話の糸口になることでしょう。帯／右ページと同じ　きもの23万円／豊中・織元　帯揚げ／加藤萬　帯締め／道明